心に効く技術−出雲の庭づくり−

林　秀樹

1 「心に効く技術」とは

人々は暮らしの中で、日頃から不安に思っていることから逃れたいと願っている。「天災が来ないように、家族が安寧に過ごせるように」思わない日はない。
心に効く技術とは、目で見ることはできない。機能的には役に立たないものであるが、人々に安心感を与え、心地よくするものだと思っている。

一般的に技術というと、目に見えるもの、実利性が高いものをいう。人々の生活に役立つものである。圃場整備や品種改良の技術は、人々の生活を豊かにする。すぐれたデザインの機器や橋梁などの設計や製造技術は、使い心地が良く、安全、安心な社会を実現するためであり、心安らぐ技術にはならないと思っている。
その結果、「心に効く技術」の出番となるのである。

2 出雲の庭に秘められた「心に効く技術」

出雲流庭園は、枯山水の平庭の意匠にこだわる。庭木は季節感のない常緑樹で縁起を担ぐ。庭の左には背の高い立灯籠を置き、右には背が低く笠が大きな雪見灯籠を据える。
この作庭手法は、出雲で最も重んじられる「庭づくりの流儀」である。その結果、この地方には「似かよった庭」が無数、数え切れないほど誕生した。
何故だろうか。
出雲の人々、特に農民たちは、「五穀豊穣・無病息災」の願いを果たすため、庭づくりに励んだ。その技は、災禍に直接立ち向かうものではなく、言霊や庶民信仰に根ざすものである。
そのことから、出雲の庭には、災禍から家族を守る「心に効く技術」が秘められていると考えると合点がいく。

今回は、出雲流庭園では欠くことができない石灯籠、特に石彫り（石彫り・彫刻）に焦点を当てて、謎を解き明かしてみたい。

2 庭の「おもて」と「うら」

出雲流庭園は、「座観式(座視鑑賞式)」
客間である「おもて座敷」から庭を見る。庭に下りて、そぞろ歩くことはない。
座観式の庭は、絵画を鑑賞するときと似ている。絵画も横や裏から鑑賞することはないし、庭も座敷から前側に向かい、鑑賞する。
このことから、座観式庭園では、庭に「おもて」と「うら」があるのである。

庭のおもて
原鹿旧豪農屋敷庭園「座敷の正面

- **庭の「おもて」**⇒「座敷」の正面
  - ＊庭木や庭石は、一番見栄えの良い側を座敷に向け据える
  - ＊主客が床の間を背に座した時に見る景趣に主眼
- **庭の「うら」**　⇒「屋敷」の外
  - ＊生垣や塀で囲まれ、後から庭を眺めることはできない

庭のうら
出雲市斐川町個人庭園
塀と生け垣で囲まれ庭は見えない

しかし、出雲流庭園では、人々から見えない「うら」にこだわって作庭している。庭に入り込み、庭の「うら」から眺めると、おもて座敷からは見えない位置に石灯籠を据えているのである。さらには、座敷から見える石灯籠であっても、石に刻まれた文様は精緻なものが多く、双眼鏡でもなければ何の文様か解らないのである。

他方「回遊式庭園」では、座敷に座って庭を鑑賞することにこだわらず、庭に入り、散策しながら鑑賞する。
四方から眺める庭である。園路を進むほどに、池があり橋を渡る、つぎつぎと新たな景趣が広がる。
一番の見どころとなるビューポイントには、展望を楽しむ築山や休息のための「あずまや」などを設ける。そこからの景趣には特段の意匠を凝らすが、「庭の正面」を意図して作庭することはない。築山からくだり裏にまわると、少し簡素とはなるが、多彩な景趣を楽しむことができるのである。

岡山後楽園庭園
回遊式庭園。人々は自由に園路をそぞろ歩き、多様な庭の景趣を楽しむ

回遊式庭園では、人々の視点場はつぎつぎに変わることから、庭を「おもて」と「うら」に区分して作庭することはない。

寺院庭園では、同じ出雲地方の庭園であっても、出雲流庭園のように庭の「うら」にこだわることはない。

寺院では、池庭・池泉式庭園が多い。出雲流庭園と同じ座観式の枯山水様式も見かけるが、庭を正面から眺めることに主眼を置いた庭づくりとなっている。

外に出て庭の裏側へ廻ってみると、石の気勢に気を配った石組みとなっているのである。石の気勢とは、石の「おもてとうら」を見極める石組みの手法であり、庭の「うら」は、単なる裏側となり、意匠的な拘りも見られない。

出雲市 勝定寺庭園
出雲流庭園と同じ枯山水式、庭の正面から見る庭

3 見えない所への拘り「石灯籠の石彫り」

石灯籠の火袋には、月日が刻まれ、春日形灯籠は鹿が陽刻(浮彫)されている。火袋の基本形は六面体。座観式の出雲流庭園では、「おもて座敷」から六面のすべての面を見ることは到底できないことである。しかし、火袋を丁寧に観察すると、人々が目にする「おもて」側だけでなく、見ることができない「うら」側にも手の込んだ彫刻がある。なぜ、こんな無駄なことをするのだろうか。

火袋の石彫りは、すべて陽刻、像が浮彫になっている。腕が立つ石工の手により、長い時間かけて刻まれる。費用もかかる。

右の写真では、一面には月が彫り抜かれ、右面には「見返りの鹿」が刻まれている。しかし、月も鹿も向きは、生垣に囲まれた庭の外側、客間である「おもて座敷」から見ることはできない。

庭の石灯籠、生垣越に見る「月や鹿」の石彫り。客間からは見ることができない。

何故、客から見えない所にこのような手間をかけることをするのだろうか。

出雲文化伝承館庭園
主木「クロマツ」の後、おもて座敷から見えない位置に「濡鷺形灯籠」を据える

「おもて座敷から見る庭は、一幅の絵画。ここから見る
石灯籠の意匠に力を注ぐべきではないか。」

最初にこのような石灯籠を見た時の感想である。石灯籠の製作には、多大な経費と時間もかかるのである。「何故だろう」この疑問・謎を解決するため、様々な仮説を立て、検証した結果、次のような答えとなった。

「人々には見えないが、外から庭を見るものがいる。
これは、家や屋敷を見守るものの為の心効く技術である。」

これまでの研究報告でも、出雲流庭園には、「五穀豊穣・無病息災」などの願いが秘められていると述べてきたが、石灯籠はその真骨頂だとの結論を得たのである。

出雲では、人々が容易に見ることができないところ「庭のうら」の景趣を大切にする。
おもて座敷に座って庭を眺める人々にとっては、特段意味をもたない、見せる必要のないものがあるのである。「おもて座敷」の人々が見ることのない石灯籠に刻まれた「鹿」の意匠から検証を進めることにする。

4 心に効く石灯籠の鹿像

石灯籠の火袋の一面に精緻に刻まれた「鹿」、奈良春日大社の神獣であり、七福神の一人「寿老人」の神使である。

石灯籠に刻まれた動物は少ない。火袋に刻まれるのは、哺乳類では鹿と、鳥類では鷺だけである。十二支を刻む石灯籠もあるが、その像は火袋ではなく、火袋を受ける基壇、もしくは頭頂・宝珠に代わり十二支の動物が据わる。

右の写真は一面に鹿が刻まれているので「春日形」。下の写真は、「春日風・春日形写し」とした。石彫りは、頭の長い寿老人と鹿である。

春日形の石灯籠のデザインは同じであるが、石灯籠が持つ効用が違うのである。

春日形灯籠　出雲文化伝承館庭園　出雲市
客間である「おもて座敷」からは、鹿音像を見ることはできない。当主の部屋の障子を開けると鹿の像が目に飛び込む。

春日大社の神々は、遠く鹿島神宮から奈良に白鹿に乗り、奈良春日山に鎮座したという。祭神は、雷や水を司る。由緒も何もないが、地震押さえの俗信もあると思っている。鹿島神宮は、ナマズの頭を抑え地震を防ぐ「要石」がある。地震を多発した江戸時代、鯰を抑える要石の錦絵がたくさん残されていることから想像したものである。春日形石灯籠に刻まれた鹿は、地震、雷、風水害から屋敷を守る。春日形灯籠を据える出雲の人々の願いが解るような気がするのである。

春日形「似」灯籠　絲原記念館庭園　奥出雲町
石灯籠はおもて座敷から遠く、石彫りの像は、小さく見ることはできない。近くによれば、寿老人が鹿を抱く

七福神の一人「寿老人」と鹿を石彫りした石灯籠は、長寿の守り神。出雲地方では、七福神まつりや七福神めぐりが各地で盛んであったと言う。かつては、不

老長寿を願う神として崇めたものだと話す古老も多い。

5 心に効く技術—出雲の庭づくり

人々は、新しい技術開発で、戦争が拡大し戦渦が広がることや環境破壊が進むことをのぞんではいない。安全で安寧な幸福な社会の実現を願っている。技術士は、その一端をにない、それぞれの分野で力を発揮している。

出雲流庭園に秘められた「五穀豊穣・無病息災」など願いを求める様々な流儀や意匠は、「迷信である、古くさい俗信だ。」ということもできる。しかし、今でも、技術開発だけでは、解決できないものは多い。台風や地震、雷などの天災や日照りや冷害などの異常気象も現代科学技術ではすべて克服することは困難である。

コロナ禍では社会に不安が広がり、大きな動揺が広がったのは、つい昨日のことである。人々は、「我が家だけでも良い、コロナに罹りませんように。」と密かに願ったものである。子どもの健やかな成長を願い、節句や七五三を祝うことは、心弾む行事である。もちろん、これらは科学的には証明されるものではなく、迷信と笑われても仕方ないことである。

迷信とはいえ、歴史ある橋梁では、今でも高欄に擬宝珠を飾る。擬宝珠は、ネギの花をイメージしたもの。花期が長いことから、橋の永代を願い、ネギの匂いで邪気を払うことを願って据えるという。

最新の技術で計画、設計、製作された橋梁でも密かに縁起を担いでいる。「心に効く技術」が潜んでいるのである。

京都 三条大橋 東海道五十三次の終点

高欄を擬宝珠で飾る
豊臣秀吉が、橋脚に御影石を寄進、日本で初めての永代橋

出雲流庭園で密かに願う「五穀豊穣・無病息災」。「ナギ」など庭木の言霊で縁起を担いだり、陰陽五行のわざを取り入れたりと、お呪いに近いものも多い。今回は、石灯籠に託された技について検証を試みた。

出雲流庭園には、巨大な手水鉢(出雲ではテンスイと呼ぶ)や短冊石、挽き臼石など、何故何のためにと疑問を持つものも多い。今後は、これらについても調査を進め、解明していきたい。